

## ●私の親父

私は親父の背中を見て育った。否、真正面から親父の笑顔を見て育った。ほぼ毎週日曜日、親父は私と弟と一緒に過ごした。親父は仮面ライダーよりかっこよく、ドラえもんより万能だった。

親父は何でも知っていた。クワガタがたくさん集まる木、オニヤンマの捕り方、魚の潜んでいるポイント、ヤマブドウの甘酸っぱい味。親父は何でもできた。私と弟が眠るための2段ベッドも作った。クワガタを飼育するための観察箱も作った。標本箱も作った。

常に親父に相談した。魚の飼いや、拾ってきたカルガモの雛の育て方、コン

トロールよく投げするためのピッチングフォーム。お陰で私は、放課後に友だちと遊びに行けば、誰よりもたくさん魚を捕り、誰よりもたくさん虫を捕った。凶工は常に5だった。少年野球ではエースで4番だった。最高の子供時代をすごしたと思っている。

## ●良くも悪くも親父流

親父はいわゆる「子育てパパ」ではなかったと思う。自分の好きなこと、楽しいと思うことを子どもと一緒にやっていただけだった。自分も楽しみな

がら。したがって、偏った影響も受けた。

長嶋茂雄は神様だと吹き込まれた。夕飯は親父の晩酌に相伴し、おかずは酒の肴だった。ケンカして泣いて帰ると「殴られた分は殴り返してこい。ただし自分から先には手を出すな」と言われた。

まだ素直だった私は、少年野球で監督がくれた背番号1を返上し栄光の「3」を着た。親父の帰りが遅い日に「3」を着た。親父の帰りが遅い日に「3」を着た。親父の帰りが遅い日に「3」を着た。親父の帰りが遅い日に「3」を着た。

ほめられた子どもではなかった。小学校2年生の時には、担任の先生に呼びつけられて指導を受けた母が、泣きながら帰ってきたこともあった。

## リレー連載⑩

お父さんも一緒！

## 親が楽しむ



会社役員  
内藤大輔（ないとう・だいすけ）

こうして出来上がったのが私である。良くも悪くも、常に親父がいた。品の良い家庭ではなかった。間違っても「お父様」ではない。親父。泥水育ちである。それでも、物心ついた時から親父は常に私の目標であり続け、私に息子が生まれ32歳になった現在でもなお、親父は私のヒーローである。

## ●私の子育て

私は親父流の子育てしかなかった。他を知らないのだから。結局、自分の楽しいと思うことに息子を巻き込んでいる。当然偏りは出るであろう。

日曜の度に3歳の息子連れて山へ

川へ海へ、網を持って出かける。クワガタを求めて、夜遅くに灯火を巡ってウロウロしている。庭に作った畑に種をまき、青虫をつまんでいる。漁港へ魚を買いに行き、息子と一緒に処理して煮つけを作っている（それで私は酒を飲み、息子は飯を食べる）。

正しい子育てをしているとは思わない。時には息子よりも私のほうが熱中し、妻に閉口されることもある。ちょっと目を離れた隙に息子がプカプカと川を流れていたこともある。灯火を回っていたときに暴走族の集団に遭遇したこともある。すり傷は堪えない。

それでも、息子の頭の中では、海に

潜って捕ったカレイとスーパーで売られているカレイと夕食で食べるカレイとが繋がっている。工事で川が荒れると魚が捕れなくなることも知っている。暑いジメジメした夜にクワガタがたくさん捕れることも知っている。「最近畑のお野菜に青虫付いてないね。この前までいっぱいだったのにね」などというところをみると、チョウの発生サイクルまで感じとっている。魚のさばき方も見ているので、よもや切り身が泳いでいると思っははいまい。

私は毎日、息子と遊んでいて最高に楽しい。当たり前である。自分の好きなことばかりしているのだから。息子はどう感じているのだろうか。楽しそうには見えない。彼が大人になったとき、何を思うのであろうか。

息子よ、お前の親父はこんな男なのだ。文句あるか？